

盛岡の夏を彩るまつり。

—— 続いてきた

価値を考える ——



今年、「盛岡さんさ踊り」が誕生して40年の節目。しかし、さんさ踊りはそれ以前から各地域に脈々と踊り継がれてきたものです。また、「盛岡七夕まつり」は江戸時代からの商人街である肴町を舞台に、大正期から続いてきたと言われます。観光資源としての価値だけではない夏まつりが地域に続く意味を、関係者の話から考えてみませんか。

40年目のさんさが生む連鎖

昭和53年の第1回開催以来、今年で40回を迎える「盛岡さんさ踊り」。8月1日から4日間にわたって、太鼓の音が夜空に鳴り響きます。今や全国に広く知られた東北を代表する祭りの一つですが、その周知や観光振興に大切な役割を担ってきたのが歴代のミスさんさ踊りたちです。

そして、記念すべき第40代選出の今年。初めて、親子2代に渡ってミスさんさ踊りとなった吉田こずえさんと彩乃さん親子に、それぞれの立場から見ると「盛岡さんさ踊り」について伺いました。

母である吉田(旧姓・堰合)こずえさん



ミス太鼓時代に学んだ「笑顔」が自然に生かされていると、彩乃さん



歴代ミスとして再び関わる機会が増え、「気持ち引き締まる」とこずえさん

んは第12代のミスを務めました。滝沢市出身のこずえさんがさんさ踊りを始めたのは小学生の頃だといいます。「お墓参りをしたあとに地元の盆踊りで踊ったのが最初かも。踊ったあとの屋台や抽選会が楽しみでした。家族も代々祭りや踊り好きだったようです」。

地域の盆踊りは、ご近所同士が子ども達の成長を確かめあい、交流を図る大切な機会だったようです。その後、「滝沢村さんさ踊り保存会」の踊り手としてパレードに出るようになります。ミスさんさ踊りに選ばれた平成元年は、盛岡市制100周年を記念して盛岡さんさ踊りの開催が4日間になった年でした。

当たり前前にさんさがある世代

一方、娘の彩乃さんは物心ついた頃からさんさ踊りに関わり、小学生の頃は母の職場である(株)川徳のキッズチームに所属。中学生になると、部活が忙しくて祭りに出られませんでした。友達と一緒に浴衣を着てさんさ踊りを見るのが楽しかったとのこと。観る側の楽しさを知る時間になったそうです。

高校時代から社会人にかけて再び祭りに参加していましたが、仕事の都合で仙台勤務になったことが、それまで当たり前前に参加していた「盛岡さんさ踊り」への思いを再確認する機会に……。ミスさんさ踊り応募への後押しになりました。これ

からの活動に向けて、「小さな子ども達の憧れにもなりたいし、それによってさんさ踊りに参加したいと感じる人が増えてくれたらいい」と思いを語ります。

かつて、同じ立場を経験した母のこずえさんは、ミスさんさ踊りの役割についてこう感じています。

「やはり、ミスさんさ5人の一人として躍るのですから、観客の視線が集中します。祭り好きでさんさを踊っているのとは違い、盛岡を代表してそこにいるという自覚が大切。私も、子ども達が躍る姿を沿道から見守った時期がありました。踊る人たちが笑顔を見せると観る側も心地よく楽しく観ることができ。躍る側が楽しさを感じれば自然に笑顔になるでしょうね」。

その昔、連綿と地域で受け継がれてきた伝統さんさ踊り。地域ごとに慣習も演目も舞い方にも違いがあるさんさ踊りを、市民総出で楽しめるスタイルとして統一したのが、現在の「盛岡さんさ踊り」です。40年を経て、これから子や孫世代へつなぐとき、「盛岡さんさ踊り」らしさの一つである笑顔は、次世代につなぐべき大切な価値なのかもしれません。

七夕まつりは 年に一度の恩返し

盛岡の夏を代表する祭りといえ、もう一つ。「盛岡七夕まつり」があります。「盛岡さんさ踊り」の熱



「各店のアイデアを凝らした飾りが見どころ」と若松さん

気冷めやらぬ8月4日から7日まで、風情あふれる七夕飾りがそよぐ肴町商店街。あえてテーマを設けず、店舗ごとに自由なテーマと素材で飾りを出すのも見どころの一つで、毎年50〜60本の七夕飾りがアーケード街を彩ります。

「その始まりは定かでない大正時代とのことだと聞きますが、昭和に入って戦後の商店街復興と共に徐々に賑やかになったようです。私は昭和38年生まれですが、物心ついた頃にはかなり大規模な祭りになっていました。毎年5月後半になると、店を閉めたあとに家族総出で七夕飾りをつくったものです。食事も出前をとったりしてね(笑)。それが子どもにとっては楽しくて、わくわくしました」。

そんな風に七夕まつりの記憶を教えてくれたのは、肴町商店街振興組合副理事長の若松裕幸さんです。昭和40年代に入るとさらに祭りは活気を増し、「人の流れが多くて道の向こう側に行けないくらいだった」と若松さん。仕事を終わった後、

手作業で七夕飾りをつくるのは昔も今も大変な作業です。

「若い頃はなぜこんな大変なことを、と思った時期もありましたが、諸先輩や先代から、お客様への恩返しなのだと思えられました。我々はお客様に足を運んでもらうことで仕事が成り立っています。ですから、1年に1回の恩返しだと思えば、楽しんでもらえるように飾りをつくるのだと。今でも皆、そう思っているからこそ、これだけ長く続いているのだと思います」。

「日々」の先にある祭り

ここ10年ほどで近隣の小学校や介護施設なども七夕飾りを出すようになっており、商店街だけでなく市民参加型の七夕まつりへと広がってきたそうです。

「自分たちがつくったものが飾ら



昭和40年代の七夕まつり



洋服店「プレタわかまつ」は、彩りを大事に毎年の飾りをつくります

れると家族で見に来てくれます。アーケードを使った他のイベントもそうですが、商店街の祭りでありながら盛岡市の道路を借りて運営していますから、できるだけ皆さんに有効に使用してほしい。我々は、いちばん『日々』が大切だと思っています。お子さん、体の不自由な方、お年寄りの方々にどれだけ優しく接することができるか。誰もが気持ち良く買い物や散歩ができるか。皆、そういう商店街でありたいと思っているんじゃないかと。祭りもその延長線上に自然にあるものと考えています」。

今や20万人もの来場者がある「盛岡七夕まつり」ですが、懐かしい空気が変わらない理由は、こうした商店街の姿勢なのでしょう。今後は、学生や市民の音楽グループなどが発表できる場も設けていけたら、と若松さんは将来への展望を語ります。